

香川大学のFD活動の実施状況

葛城浩一	一（大学教育開発センター准教授・調査研究部委員）
竹中龍範	（教育学部教授・研究開発委員長）
中島洋樹	（法学部准教授・教務委員会委員）
水野康一	一（経済学部教授・学部評価委員会委員）
三木崇範	（医学部教授・医学科FD委員長）
吉田秀典	（工学部教授・教務委員会副委員長）
深井誠一	一（農学部教授・教育センター長）

1. はじめに

本学の全学的なFDプログラムは、年々、質・量ともに充実したものになってきている。平成17年度までは、全学的なFDプログラムは、5月に開催される「新任教員研修会」と、12月に開催される「全学共通教育の次年度実施に向けた研修会」、不定期に開催されるFD講習会のみであった。これらのFDプログラムは、啓蒙・啓発的な要素や情報提供的な要素が強いものであった。そこで、平成18年度からは、実践的な要素の強いFDスキルアップ講座を実施している。また、教員だけでなく、職員との協働という視点に基づく研修会も必要であるという認識から、平成20年度からは、PD (Professional Development) 研修会も実施している。

さらに、平成20年度文部科学省戦略的大学連携支援事業の採択を機に設立された「四国地区大学教職員能力開発ネットワーク」（以下、SPODと表記）に加盟したことで、本学の全学的なFDプログラム（の一部）が、SPOD加盟校に開放されることになった。既に平成21年度からは、8つのスキルアップ講座が開放され、平成22年度からは、従来行われてきた新任教員研修会とは異なる、新たな「新任教員研修会」が開放される予定である（次稿『新しい「新任教員研修会」の検討の記録』参照）。

このように、本学の全学的なFDプログラムは、SPOD事業により、SPOD加盟校との連携の下で構想されるようになってきている。しかしその一方で、学内には、本学で行われるFDプログラム全体を包括的な視点で捉えるような組織が整備されておらず、全学的なプログラムは各学部のプログラムとの連携の下で十分構想されているわけではない。

そこで、本学では、昨年度から、「全学共通教育の次年度実施に向けた研修会」の分科会において、「今後のFDのあり方を考える分科会」を設けることにした。この分科会では、各学部のFD担当者に出席していただき、各学部のFD活動の実施状況について情報交換を行うとともに、今後のFDのあり方についての意見交換を行っている。本稿では、以下、本年度に実施された「今後のFDのあり方を考える分科会」で提示された資料を示した後、今回の分科会で明らかになった本学のFD活動が抱える問題点を提示したいと考える。

（葛城浩一）

2. 全学的なFDプログラムのFD実施状況

(1) FDの主な実施組織

大学教育開発センター調査研究部

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

【平成20年度】

- ・平成20年度新任教員研修会（5月29日）、新任教員対象、参加人数19名
- ・FDスキルアップ講座夏「見やすいプレゼンテーションを行うために」（8月5日）、
本学教職員対象、参加人数16名
- ・FDスキルアップ講座夏「Power Pointによるマルチメディア情報の扱い」（8月7日）、
本学教職員対象、参加人数11名
- ・FDスキルアップ講座夏「EduCanvasを用いた遠隔講義の方法とコンテンツの作成方法」
（9月1日）、本学教職員対象、参加人数18名
- ・FDスキルアップ講座夏「授業実践へのワークショップの効果的な活用法」（9月4日）、
本学教職員対象、参加人数15名
- ・PD研修会「教職協働の実現をめざして－FD・SDからPDへ－」（12月8日）、
本学教職員対象、参加人数51名
- ・全学共通教育の平成21年度実施に向けた研修会（12月16日）、
本学教員対象、参加人数約100名

【平成21年度】

- ・平成21年度新任教員研修会（5月21日）、新任教員対象、参加人数25名
- ・FDスキルアップ講座夏「小粋なプレゼンテーション」（8月4日）、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数13名
- ・FDスキルアップ講座夏「ちょっと気になる学生への対応とその理解」（8月20日）、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数23名
- ・FDスキルアップ講座夏「動機の低い聴衆に聞かせる方法」（8月31日）、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数18名
- ・FDスキルアップ講座夏「e-Learningと遠隔会議システムの活用」（9月28日）、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数10名
- ・PD研修会「教職協働の実現をめざして－学生中心の大学として今、考えること－」
（12月2日）、本学教職員対象、参加人数36名
- ・全学共通教育の平成22年度実施に向けた研修会（12月15日）、
本学教員対象、参加人数約100名
- ・FDスキルアップ講座冬「話し方講座」（2月26日）、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数12名

- ・FDスキルアップ講座冬「学生のメンタルヘルス」(3月5日)、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数12名
- ・FDスキルアップ講座冬「自ら考え続ける力を養う教育をどう進めるか」(3月8日)、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、参加人数10名
- ・FDスキルアップ講座冬「学生支援にどう取り組むか」(未定)、
香川県内のSPOD加盟校の教職員対象、未実施

(3) 授業公開の実施状況

半期ごとに、主題科目、共通科目、教養ゼミナールのローテーションで1科目実施。

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

分析結果を、全学共通教育の次年度実施に向けた研修会の際に資料として用いたり、大学教育開発センターの紀要(『大学教育研究』)等の報告書にまとめたりすることで、今後の授業及びカリキュラムのあり方を考える際の基礎資料としている。

(6) FDによる成果

- ・スキルアップ講座への参加者は増加している。
- ・参加者アンケートからは、満足度も非常に高いことが確認できる。

(7) 問題点・課題

・参加者の確保が難しい

「突然行事連絡が入り、日程調整に苦慮する。年間計画を調整し、早い段階で明示して意識化すべき」(参加者アンケートより 54頁参照)という意見をふまえ、次年度はそうした対応により、参加対象者の便宜を図れるようにする予定である。なお、スキルアップ講座については、今年度から、次年度の年間計画を示している。

・FDプログラムの参加者以外のニーズの把握ができていない

次年度のプログラムの企画は、プログラムの参加者に対するアンケート等を参考に行っている。しかし、「参加する方はいつも参加するし、参加しない方はいつも参加しない」(参加者アンケートより 53頁参照)現状に鑑みれば、プログラム参加者以外のニーズの把握が必要である。次年度以降の課題としたい。

・学部のFDプログラムとの連携がとれていない

上述のような問題点を解決するためにも、今回の分科会のような、各学部のFD担当者との情報交換や意見交換を行う「場」を設けることは重要である。こうした「場」を母体として、本学で行われるFDプログラム全体を包括的な視点で捉え、全学的なプログラムと各学部のプログラムとの連携を促すような組織についての検討も行いたい。

(葛城浩一)

3. 教育学部のFD実施状況

(1) FDの主な実施組織

研究開発委員会、学務委員会、総務委員会

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

【平成20年度】

- ・ ずばるFDならびに新任教員FD（研究開発委員会）（7月2日）、学部教員対象、参加人数前半30名、後半17名
- ・ 平成19年度研究開発プロジェクト研究成果報告会ならびに科研費申請に関する学習会（研究開発委員会）（7月30日）、学部教員対象、参加人数30名
- ・ 科研対策－応募書類のセルフチェックとアドバイザーの活用（研究開発委員会）（10月8日）、学部教員対象、参加人数43名
- ・ 先行大学に学ぶ学部・大学院改革の取り組みと課題（将来計画委員会）（10月8日）、学部教員対象、参加人数47名
- ・ 授業公開ウィークを振り返って（学務委員会・研究開発委員会）（12月17日）、学部教員対象、参加人数17名
- ・ 大学院教育学研究科FD「教育実践力を焦点とした大学院教育の課題」（総務委員会）（1月28日）、研究科委員会構成員対象、参加人数30名
- ・ 第9回学部・附属学校園教員合同研究集会（学部・附属共同研究機構）（2月27日）、学部教員・附属学校園教員対象、参加人数166名

【平成21年度】

- ・ 前期授業公開FD（学務委員会・研究開発委員会）（7月22日）、学部教員対象、参加人数29名
- ・ 新任教員FD（研究開発委員会）（7月22日）、学部教員対象、参加人数10名
- ・ 平成20年度研究開発プロジェクト研究成果報告会（研究開発委員会）（8月5日）、学部教員対象、参加人数26名
- ・ 科研対策－アドバイザーによる相談会（研究開発委員会）（10月1日）、学部教員対象、参加人数20名
- ・ 後期授業公開FD（学務委員会・研究開発委員会）（12月2日）、学部教員対象、参加人数16名
- ・ 大学院教育学研究科FD「大学院生からみた大学院教育の課題」（総務委員会）（1月27日）、研究科委員会構成員対象、未実施
- ・ 第10回学部・附属学校園教員合同研究集会（学部・附属共同研究機構）（2月26日）、本学部教員・附属学校園教員対象、未実施

(3) 授業公開の実施状況

平成21年度は、前期の授業公開FDでは、25人の教員から32の授業が公開された。公開授業検討会参加者は29人であった。後期の授業公開FDでは、20人の教員から29の授業が公開された。公開授業検討会参加者は16人であった。

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

授業評価アンケートの結果は、学務委員長が毎回詳しく調べ、特に評価の高い授業や、昨年と比較して評価の上がった授業の担当者とできるだけ懇談の機会を設けるようにしている。

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

カリキュラム評価は、卒業生によるカリキュラム評価と学生によるカリキュラム評価（2年に1度）を行っている。学務委員会の検討事項に盛り込んで長期的に検討している。

(6) FDによる成果

- ・他の課程・領域・教科の取り組みについて知る貴重な機会となっている。
- ・自らの教育・研究を見直し、課題や改善の手がかりに気づく機会となっている。

(7) 問題点・課題

- ・より多くの参加者が得られるように研修会の内容や実施時期・方法を検討する必要がある。
- ・研修会による効果の把握について検討する必要がある。

(竹中龍範)

4. 法学部のFD実施状況

(1) FDの主な実施組織

教務委員会

平成18年度までは専門の委員を置かず、教務委員会において教務委員長主導のもとでFDが企画・運営されていた。平成19年度からは、教務委員会内部にFD担当を常設し、部局内FDの企画・運営を常態化させている。

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

【平成20年度】

- ・FD研修会「効果的な授業手法を学ぶ」（12月10日）学部教員対象、参加人数19名
- ・FD研究会「大学院受験者の動向」（3月21日）学部教員対象、参加人数21名

【平成21年度】

- ・FD研修会「学生の自殺を予防するために」（6月17日）学部教員対象、参加人数21名
- ・FD研修会「就職支援とキャリア教育」（11月18日）学部教員対象、参加人数20名
- ・FD研修会「①効果的な授業手法 ②少人数教育」（2月6日）学部教員対象、未実施
- ・FD研修会「(仮) 大学院FD」（3月15日）学部教員対象、未実施



FD研修会「就職支援とキャリア教育」の様子

(3) 授業公開の実施状況

授業参観の形態では行われていないが、授業評価アンケートの評価が良かった教員の授業を録画してFDの素材として使用している。例えば、平成20年度に行われたFD研修会「効果的な授業手法を学ぶ」では、授業評価アンケートの評価項目のうち、「学生の理解度を把握して授業を進めている」、「授業時間外の学習（予習復習等）を促す工夫がなされている」の各項目が最も評価の良かった教員各1名の担当講義を録画し、研修会で視聴後、質疑応答が行われた。そこで議論・意見交換を行うことにより、各教員による担当科目へのフィードバックが期待されるが、そ

これは「評価の高い授業を参考にする」という趣旨であり、全教員の授業を録画して「改善すべき点を積極的に探知する」という趣旨ではない。

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

- ・(3)で詳述したように、FDに活用される授業録画の対象となる講義を選出するために用いられている。
- ・全科目のアンケート評価結果を共有し、アンケート用紙を担当教員に返却することにより、教員が各自で改善に努めるための資料としている。
- ・自由記述欄に寄せられた意見に関しては、教務委員会が目を通して把握し、必要に応じて個別に対応している。

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

カリキュラム編成の見直しが行われる際に資料の1つとして活用されている。近年では、平成19年度に行われたカリキュラムの見直しにおいて判断材料の1つとなった。アンケート調査結果および自由記述から認められる問題点を整理し、例えば、専門科目の学年配分について、1、2年次に履修できる科目を増やして欲しいとの意見が多く見られた点について、上述のカリキュラム見直しに反映され、平成20年度より、漸次、2年次に履修できる科目を増やしたカリキュラムへと移行している。

(6) FDによる成果

授業評価アンケートの評価ポイントが微増しており、各教員における改善の努力が明確に確認できる項目もある。

(7) 問題点・課題

授業録画という形で授業公開をしており、授業評価アンケートの結果を参考にしてFDのテーマに沿った項目について評価の良い教員の講義を授業録画の対象として選出するが、選出の基準およびそれに対応するFDのテーマが最近マンネリ化しつつある。また、それに伴って、選出される教員の顔ぶれも固定化してきている。

全学FDには多様なテーマが見られるが、少人数ゆえ1人あたりの負担の大きい法学部の教員が多数参加する見込みは少ない。全学FDには有用なテーマも企画されているため、その縮小版を学部FDに呼び込むことも検討したい。

(中島洋樹)

5. 経済学部のFD実施状況

(1) FDの主な実施組織

学部評価委員会、教務委員会、研究企画委員会など、学部の各種委員会がそれぞれの職掌からFDを実施している。

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

【平成20年度】

- ・学生による授業評価に基づくFD（5月21日）、評価委員会主催、全教員対象、参加人数43名
- ・少人数教育に関するFD（6月25日）、教務委員会主催、全教員対象、参加人数37名
- ・科研および研究プロジェクトに関するFD（7月30日）、研究企画委員会主催、科研未採択者対象、参加人数30名
- ・学習到達目標に関するFD（12月17日）、教務委員会主催、全教員対象、参加人数38名
- ・教育プロジェクトに関するFD（3月5日）、学部運営会議主催、全教員対象、参加人数31名

【平成21年度】

- ・学生による授業評価に基づくFD（6月17日）、評価委員会主催、全教員対象、参加人数49名
- ・大学院FD「修士論文の指導について」（11月18日）、研究科運営委員会主催、全教員対象、参加人数46名
- ・学生支援に関するFD（12月16日）、学生生活委員会主催、全教職員対象（PD）、参加人数42名
- ・コース制に関するFD（1月20日）、教務委員会主催、全教員対象、未実施

(3) 授業公開の実施状況

一昨年度より、経済学科、経営システム学科、地域社会システム学科の各学科1科目について授業公開を行っている。授業者と参観者で意見交換を行い、その内容を報告書にまとめ教務委員会に提出している。

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

アンケート結果は授業科目ごとにまとめ、学生には掲示を行い、また教員には教授会報告資料として配付を行っている。また、アンケート結果に基づいて、学部評価委員会の主催で毎年FDを行っている。

FDでは、まず全体会として、全科目のアンケート結果を資料として提示したうえで、今年度、改善に取り組むべき検討課題を提示し、質疑応答を実施している。続いてコース別の分科会で、事前に設定した数値目標に照らして改善点の洗い出しをしている。分科会の結果は報告書にまとめ、こちらを教授会報告資料として配布している。

授業評価アンケートの自由記述欄は、学部評価委員会でも閲覧している。学生の苦情などから講義において問題やその火種となりうる状況が発生していないかをチェックし、問題となるような回答があった場合には、教員にアンケート用紙を返却する際に付箋を付し、注意喚起を行って

いる。

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

経済学部では、「カリキュラム・授業等についての全般的な評価」アンケートを独自に毎年行っている。アンケート結果から、教員との緊密な触れ合いと、きめ細かな教育の教育を行う必要を認め、平成18年度より少人数教育のカリキュラム改革を実施した。同時に体系的な学習を促す目的でコース制を導入し、コース別履修モデルを提示している。その後も科目の追加と削除、履修区分の変更などをこまめに行っているが、カリキュラムアンケートの結果はこれらの改革に対する学生側の意見として、貴重なデータとなっている。

(6) FDによる成果

毎年継続的に実施している授業評価アンケートに基づくFDを例にあげると、取り組みの結果として、授業に対する学生の評価が実施以前に比べて上昇していることから、一定の成果があがっていると見える。教員活動評価にこのアンケート結果が勘案されるようになったのもその一因と考えられるが、FDや授業公開における教員同士の意見交換などを聞いていても、各教員に積極的に授業改善に取り組もうという姿勢が感じられる（経済学部では全ての授業について教員が自ら評価を行っているが、授業に対する積極的な姿勢はこの自己評価報告書の記述の内容や分量によく表れている）。

その他のFD研修についても、新任教員からベテラン教員まで、各自の授業改善および、研究活動や職務の遂行に有益な情報を得る良い機会となっている。

(7) 問題点・課題

経済学部では各委員会がその職掌に関わるFDを年1回開催することを目標としており、全教員にその出席を義務づけている。FDの開催状況や参加者の出席状況はこれまで良好であるが、学部内でのFD活動が一巡したこともあり、今後テーマによっては（例えば授業改善などに関する議論について）マンネリとなるおそれがある。また、全学で開催されているFDと一部内容が重複してしまうケースもあった（学生支援FD）。これからは学部独自のFDと全学のFDとの間で調整が必要になるだろうと考える。

(水野康一)

6. 医学部のFD実施状況

(1) FDの主な実施組織

医学部FD委員会：医学科FD委員会、看護学科FD委員会

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

【平成20年度】

- 医学科：**・「CBT作問をテーマにしたワークショップ」（4月25日）、授業担当教員対象、参加人数72名
- ・「卒前医学教育に求められる実践的臨床能力の向上－クリニカル・クラークシップと地域医療実習を中心に－」（9月4日、8日）、授業担当教員対象、参加人数175名
 - ・「E-Learning（授業自動収録）に関するワークショップ」（3月19日）、授業担当教員対象、参加人数92名
- 看護学科：**・「フィジカルアセスメントの考え方、教え方」（2月23日）、授業担当教員、看護部職員、救命救急センター職員対象、参加人数39名

【平成21年度】

- 医学科：**・「CBT作問をテーマにしたワークショップ」（4月10日）、授業担当教員対象、参加人数60名
- ・「国際交流から見たチュートリアル」（10月15日、19日）、授業担当教員対象、参加人数187名
- 看護学科：**・「救命処置のスキルアップと学生の救命演習への応用」（11月29日）、看護学科教員対象、参加人数11名
- ・「フィジカルアセスメントの考え方、教え方2」（1月7日）、看護学科教職員対象、参加人数39名

(3) 授業公開の実施状況

- 医学科：**・神経生物学－感覚系（平成20年5月22日、中村丈洋講師、24名）
- ・早期体験学習－手術で治る脳の病気（平成20年6月4日、田宮隆教授、27名）
 - ・統合講義 Unit 7－前立腺癌、前立腺肥大症（平成20年11月10日、笥善行教授、31名）
 - ・臨床総論講義－救急災害医学総論（平成21年9月7日、黒田泰弘教授、35名）
 - ・統合講義 Unit 4－関節リウマチ病態・症候（平成21年10月6日、土橋浩章講師、21名）
 - ・生理学 I－脊髄と脳幹の運動機能と反射（平成22年1月27日、徳田雅明教授、17名）
- 看護学科：**・基礎看護援助論Ⅲ－与薬の看護（2）：注射法（皮下注射・筋肉注射）（平成21年6月5日、南妙子准教授、21名）

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

授業評価の結果は授業担当教員に配布するとともに、学生に対して掲示を行うことで、カリキュラムのあり方を考える基礎資料としている。また、一部教員評価のためにも使用されている。

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

評価アンケートは、カリキュラム作成にあたって学生の意見が反映された基礎資料として参考にしている。また、これとは別に学生代表との話し合いの機会を設け、学生からの要望・意見がなるべく反映されたカリキュラム作成を行っている。

(6) FDによる成果

- ・教員のFDワークショップへの出席率は高く、FDへの取り組みや教育向上への意識が自覚されているといえる。
- ・授業公開は、教員各自の授業スキルの向上に大きく役立っている（配布資料の作り方、カラー印刷、パワーポイントの作り方の要領、対話形式の授業方法など）。
- ・全国医学部のなかで本学医学部のCBT問題採択率は、90%を超えた（平成21年度）。これはCBT作問FDの効果の現れであると同時に、次年度作問の励みにもなり、教員のモチベーションアップにつながった。
- ・授業と自動収録システムが導入され、このシステムで収録された授業は、学生の復習に使われているだけでなく、感染性疾患（インフルエンザなど）で欠席しても、後日当該授業を本システムを介して受けることができるというメリットが明らかになった。
- ・過去3年間の香川大学医学部附属病院のマッチング（卒後研修先の選択）定員充足率は、100%（平成19年度）、87.5%（平成20年度）、94%（平成21年度）である。これは、地方の国立大学法人附属病院としては、群を抜いて優秀な成果である。学部学生の時代の教育システムや教員の資質が、学生に高く評価されている結果といえる。
- ・平成21年度の医学科FDワークショップでは、チュートリアル教育に関して、教員と学生8名が共同してワークショップを行った。学生がFDの主役になることで、教員のモチベーションが向上するばかりでなく、チューターの役割が再認識され、参加教員から高い評価を得た。また、学生から教員への提言として、生の声を聞くことができた。

(7) 問題点・課題

- ・学生による授業評価アンケートの結果は、授業担当教員に周知されているが、これが、次年度以降の授業に反映され、改善されなければ、アンケートは意味をなさない。フィードバック機構の構築が今後の課題である。
- ・実施時々の問題点に着目したFDの模索の必要性。
- ・カリキュラム作成にあたり学生の意見がよりフィードバックされる工夫が必要である。
- ・全教員のFDに対する自覚の更なる向上が求められる。

(三木崇範)

7. 工学部のFD実施状況

(1) FDの主な実施組織

工学部教務委員会FD部会

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

学部／大学院FD

【平成20年度】

- ・工学部FD研修会（11月4日）、学部教職員対象、参加率50%
- ・工学部FD研修会「学生による授業評価から授業改善を探る」（3月17日）、学部教職員対象、参加率60%

【平成21年度】

- ・工学部・大学院工学研究科FD「学生の心模様とそこのかかわり方」（7月31日）、41名（教員31名（構成員の約42%）、事務職員10名）
- ・工学部・大学院工学研究科FD「授業評価を通してみる講義手法」（11月30日）、45名（教員43名（構成員の約60%）、事務職員2名）
- ・大学院工学研究科FD「PBL方式と座学の違い」（仮）（3月予定）、未実施



平成21年度第3回FD研修会の様子

各学科FD

・安全システム建設工学科

年1-2回、学科のカリキュラム、学生の理解度についての検討を学科会議等で行っている。2009年度は、学科の公開授業を終えた12月に実施済。参加率約89%。

・信頼性情報システム工学科

教育システム検討委員会を設置し、その下に設置された3つのWGとともに、2003年度より活動を開始し、カリキュラムの改訂などを行っている。

- ・知能機械システム工学科

平成20年度8月に2回、参加率約80%。

- ・材料創造工学科

物理・数学授業間連絡会議（対象：数学・物理関係講義担当者）平成20年度3回、参加率60%。

(3) 授業公開の実施状況

平成21年度より実施。以下の4つの講義（各学科1講義）の公開を実施した。

- ・社会システム（12月14日、岡野真教授）
- ・論理回路（10月16日、北島博之准教授）
- ・量子力学入門（11月6日、鶴町徳昭准教授）
- ・構造解析（12月17日、三原豊教授）

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

工学部教務員会で授業評価の傾向から、改善すべき点、問題点を洗い出すために利用している。この他には、次年度に向けた授業改善のために各自教員がアンケートを参考にしている。

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

現段階では活用に至っていない。今後、活用方法を検討していく予定である。

(6) FDによる成果

授業方法を改善していくことへの学部全体としての意識の向上につながりつつある。これまであまり想定されていなかった学生による授業評価を参考にする、他の教員の授業を参考にする、他の教員の手法を取り入れるなどが行われるようになりつつあると判断できる。また、認証評価、法人評価で対象となる「厳正な成績評価」をいかに達成するかについて、まだ結論は出ていないものの、議論されるようになったことはFD実施の成果であると考えられる。

(7) 問題点・課題

- ・FDについては、一部の教員しか出席しておらず、複数回実施しても、出席しない教員はいずれの回にも出席しない。
- ・工学部および大学院工学研究科ではカリキュラムの関係上、全ての教員に対して講義や会議が無い日程の設定は困難。止むを得ず学生の休業中（夏季や春季）に実施しているが、講義がなくとも学会活動などと被ることが多く、全ての教員が参加できるような日程の確保は困難。

(吉田秀典)

8. 農学部のFD実施状況

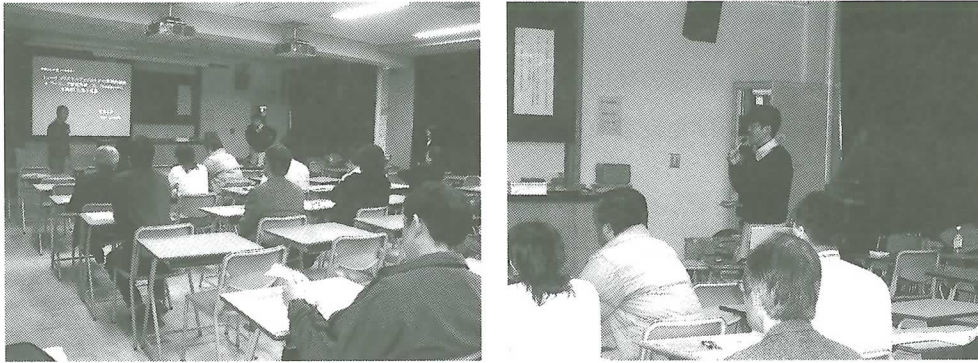
(1) FDの主な実施組織

農学部教育センター（企画・実施）

(2) 過去2年間で実施したFD（研修会等の名称・日時・対象・参加状況等）

【平成20年度】

- ・FD研修会「今後の農学部入試戦略」（12月11日）、学部教員対象、参加人数24名
- ・FD研修会「発達障がいのある学生の支援」（1月16日）、学部教員対象、参加人数37名
- ・FD研修会「ティーチングスキルアップのための実践的研修－e-ラーニング教材作成ソフト「EduCanvas」を利用した電子黒板－」（3月9日）、学部教員対象、参加人数24名



平成20年度FD研修会の様子

【平成21年度】

- ・FD研修会「学部共通基礎科目におけるe-ラーニング教材の活用」（9月14日）、学部教員対象、参加人数16名
- ・FD研修会「就職支援とキャリア教育に関するFD研修会」（10月22日）、学部教員対象、参加人数36名
- ・FD研修会「基礎実験科目におけるIT機器の有効利用（仮）」（開催日時未定）、学部教員対象、未実施
- ・FD研修会「農学部のアドミッションに関するFD研修会（仮）」（開催日時未定）、学部教員対象、未実施

(3) 授業公開の実施状況

農学部では平成21年度から授業公開を実施した。平成21年度では、平成20年度後期にベストティーチャー賞を受賞された教員の講義を対象に、教員による参観を行った。授業参観後、参加教員に「印象に残った点」、「自分の授業に役立てたい点」などについてアンケートをとった。

(4) 学生による授業評価アンケートの活用法

農学部では、全ての学部開設科目の学生アンケート集計結果と学生に対する成績評価分布表を、授業改善のための資料として、学部教員に配布している。さらに、平成20年度からは、学生による授業評価のポイントが高い上位2科目に対して教育優秀者の表彰をしている（ベストティーチャー賞）。この科目については、農学部教員の教育の質的向上に資することを目的として、平成21年度から講義を公開している。

(5) カリキュラム評価アンケートの活用法

農学部では平成18年度より生命科学を基盤とする特徴あるコースカリキュラムを編成し、新カリキュラムを導入した。これは、学生の主体性に応じたコース選択を可能にしたものである。分析結果を参考に、新カリキュラムでの授業をさらに改善するように、農学部教育センターを設置して検討を重ねている。

(6) FDによる成果

農学部においては、農学部教育センター所管のアドミッション、カリキュラム、学生支援の3委員会が連携して多面的なFD活動推進を企画・運営する組織的な取り組みを行っている。これまでのFD研修では参加者にアンケート実施した結果、それぞれの課題への理解が深まったことが伺える。今後の授業や学生支援活動などに取り入れたいとする意見が多数見られたことから、目に見える形で成果が期待される。

(7) 問題点・課題

例年、FD開催時期が遅くなる傾向があり、早期の実施計画が必要である。また、参加者数を増やす取り組みも必要であると思われる。

(深井誠一)

9. おわりに

平成22年度に実施された「今後のFDのあり方を考える分科会」では、本学のFDプログラムが抱える問題点がいくつか明らかになった。主な問題点を2点ほど紹介したい。

まず、FDプログラムの参加者の確保という問題である。一昔前であれば、FDと名のつくプログラムはあまり行われていなかった。そのため、プログラムへの参加を呼びかければ、一定数の参加者を集めることはそう難しいことではなかった。一方、現在では、全学的なプログラムだけでも、量的には非常に充実したものになっている。しかし、それが故に、プログラムのインフレ化とも呼べる状況に陥っていると考えられる。すなわち、プログラムがあらゆるレベルにおいて行われることによって、教員のプログラムに対する意識が希薄化しているような状況に陥っていると考えられるのである。

こうした問題とも大きく関係しているのが、FDプログラムの参加者のモチベーションの低下という問題である。各部局とも、プログラムを企画する側は、アリバイ的な取り組みとならないよう、より充実した内容のプログラムを企画しようとする努力がうかがえた。しかし、プログラムに参加する側の意識は年々低下しているのではないかという意見が少なからずみられた。プログラムの途中で退席するような教員も増えているという。その要因のひとつになっていると考えられるのが、教員の総合評価である。本学の教員の総合評価では、教育活動評価の評価項目のひとつとして、FD活動への取り組み状況が設けられている。そのため、「参加しなければならないから」という、極めて消極的な姿勢でFDプログラムに参加する教員が増えていると考えられるのである。

参加者を確保しようと、何かしらの強制力を働かせれば、自主性が損なわれる。自主性が損なわれると、参加者のモチベーションも低下していく。モチベーションが低い状態でのプログラムへの参加は、プログラムに対するまなざしを歪んだものにする。その結果、プログラムに対する評価は低いものとなり、次のプログラムへの参加に対するモチベーションを低下させてしまう。プログラムへの参加に対するモチベーションが低下すれば、参加者の確保がさらに困難なものになる。

こうした悪循環を断ち切ることは容易なことではない。なぜなら、上記の問題点は、教員の多忙化等、解決することが困難な別の問題点と複雑に関係しているからである。そうした点をふまえて、悪循環を緩和するための方策を挙げるならば、それはより充実した内容のプログラムの提供ということに尽きるだろう。そのためには、まずプログラムを企画する側が、アリバイ的な取り組みとならないよう、より参加対象者にとってニーズの高いプログラムを企画していく必要がある。また、既に実施されているプログラムの中にも、参加してみればその良さを実感できる講座も少なくないことを考えれば、プログラムへの参加を促す広報のあり方も改めて見直す必要があるだろう。

参加者にとっての「はずれ」をできるだけ少なくし、プログラムに対する評価を高めていくこと、それが「リピーター」の獲得につながるとともに、「口コミ」による参加者の増加、すなわちモチベーションの高い参加者の増加にもつながる。このような好循環へと変えていくための一助として、今回設けた分科会のような、各学部のFD活動の実施状況についての情報交換や意見交換を行う「場」は非常に重要であると考えられる。こうした「場」を母体として、本学で行われるFDプログラム全体を包括的な視点で捉え、全学的なプログラムと各学部のプログラムとの連携を促すような組織の整備が望まれる。

参考資料：各部局等のFD活動の実施状況一覧

	全学	教育	法	経済	医	工	農
新任教員向けガイダンス	○	○					○
FDや学生支援に関する講演会やシンポジウム	○	○		○	○	○	○
シラバス作成や授業技法(ティーチング・スキル)に関する実践的な研修	○	○	○		○	○	○
カリキュラム改善に関する実践的な研修	○			○		○	○
学生支援に関する実践的な研修(学生との接し方研修等)	○		○	○		○	○
授業検討会		○	○	○		○	
授業コンサルテーション(授業に関する相談事業)			○				
学生と教員の座談会	○		○		○		○
学生による教育改革の促進(学生の声を反映する取組)	○		○	○	○		○
ニュースレターの発行	○					○	
教育実践の論文化支援(教育実践を掲載するジャーナルの発行)	○	○					
学内経費に基づく教育改善事業(学内GP等)	○	○		○		○	